

考古学から見た播磨町の遺跡や出土品など、文化財のよもやま話をお届けします。

播磨町むかし昔

その八 『播磨国風土記』の荒ぶる神②

坂（峠）・道路・河川など、いわゆる交通路上の境界地に住まう荒ぶる神は、古代の旅人にとって恐ろしい存在であるとともに、地元民はそれを繰り返し鎮め祭ることにより、自らを守る存在へと転化していきました。

考古学では、神事・祭祀に関わる事象を研究する分野をかつては神道考古学、現在は『祭祀考古学』と呼んでいます。神事とはカミや神マツリに関わる様々な儀式や所作のこと、祭祀とはカミや祖先に対し、敬い・もてなし・祈る行為のことです。また、祭祀には祈る行為とともに、神に捧げる神饌や幣帛などの供物（祭料）を伴います。そして、祈る行為は残らないので見ることはできませんが、供物は残存することがあります。これを祭祀遺物と言います。祭りの場と祭祀遺物を保管または廃棄した場所が、祭祀遺構（遺跡）になるのです。

播磨国風土記の神話は素朴な土着神

に関係するものが多く、このことから前代の古墳時代の出来事を書いた可能性が高いと考えられます。古墳時代の代表的な祭祀遺物としては、鏡形・有孔円板・勾玉・白玉・剣形・刀子・子持勾玉などの石製模造品と、鏡形・勾玉・人形・舟形・馬形・短甲・盾・鍬先・機織具などの土製模造品、刀子・斧・鎌・鍬先形などの鉄製模造品、そして刀形・斎串などの木製模造品が出土しています。

石製模造品は古墳に副葬された鏡・玉・剣などを滑石で代用し、倭玉権が国内を支配する過程で、神祭りの道具を統一するために新しく製作したものです。一方、土製模造品は『肥前国風土記』にも見られたように、粘土で人や馬など神様が好むものを模した製品です。

【問合せ】 播磨町郷土資料館 学芸員 大平 茂
☎ 079 (435) 5000

上からの図



正面の図

横からの図

10cm



斧形土製品の写真

加古川市神野大林窯跡出土「斧形土製品」
(兵庫県立考古博物館提供)

これらの中で、佐比と関わる鉄製品は現在のところ、墳墓祭祀である古墳の副葬品に多く発見され、純粋な祭祀遺跡ではなぜか少ない状況があります。なお、各地の祭祀遺跡にはこの代用品と考えられる土製模造品が出土しています。播磨では祭祀遺跡ではなく生産遺跡の、相生市丸山窯跡にU字形鍬先もしくは鍬先の模造品2点、そして加古川市神野大林窯跡で斧の模造品1点が確認できました。

町の人口 10月1日現在

住民基本台帳人口()は前月比

34,785人(+13人)

男…17,006人(-2人)

世帯数…14,405世帯(+22世帯)

女…17,779人(+15人)

